

## 「生きもの与人・共生の里」周南宣言

南北に細長い島国で、四季のはっきりしている日本の自然は生物多様性が豊かで、数多くの野生生物が生息・生育しています。なかでも雑木林、水田、ため池、集落などが混在する里地里山は日本の代表的な自然環境の一つで、そこではむかしから人間と生きものがともに生活の場を共有してきました。

人々はタヌキやキツネ、ツル、トキ、コウノトリなど人里に姿を見せる野生の生きものを、自然からの恵みとしてとらえるばかりでなく、歌に詠み、民話やおとぎ話に登場させるなど、日本の暮らしの中にとけこみ、里地里山をわけあう仲間として認め、特有の文化を築いてきました。

しかし、急激な社会経済の変化の中で、私たちの暮らしのスタイルの変化とともに、各地の生きものと共に暮らす伝統は途絶えつつあり、かつて身近にいた野生の生きものの多くが減少し、姿を消しています。このような状況を危惧し、失われた自然環境の再生や、絶滅のおそれのある野生生物の保護や野生復帰への取り組みもさまざまな形で行われるようになってきました。

こうした日本各地で行われている生きもの与人との共生への取り組みについて、情報と経験の交流を図り、生きもの与人とのよりよい関係の構築と、さまざまな関係者による協働の可能性を模索することを目標に、この「生きもの与人・共生の里を考える会議」は開催されました。

会議を通じて私たちは、山口県周南市における世界初のナベヅルの移送による渡来数回復の試みを、新潟県佐渡市におけるトキの人工繁殖と野生復帰に向けた取り組みを、兵庫県豊岡市における日本初のコウノトリの野生復帰事業の成功とこれからの課題を、そして鹿児島県出水市における地域をあげてのツル保護の取り組みを、生きもの与人の共生をめざすすぐれた先進事例として学びました。そして、生きもの与人との共生の意味と意義について話しあい、多くの共通点と課題を共有し、生きもの与人とが互いのルールを守りながら、新しく進化させた共生関係を築きあげることの重要性を強く認識しました。

私たちは、この会議の成果を、同じ思いを共有するさらに多くの人々と分かちあい、協働のためのネットワークを将来にわたって広げていくことをめざします。

私たちは、生きもの与人との共生に取り組んでいる各地域と情報の交換と経験の交流をいっそう推進し、関係するすべての人たちと協力して「生きもの与人・共生の里」づくりに向けての行動を力強く継続することを宣言します。

2006年5月27日

生きもの与人・共生の里を考える会議

参加者一同